

## 『箱男』における革命家幻想

黒田大河

### 序

安部公房『箱男』は一九七三年三月三〇日付けで、「純文学書下ろし特別作品」として新潮社より刊行された。前作『燃えつきた地窓』（一九六七）から五年半ぶりの小説である。だが国際的にも高い評価を受けた『砂の女』（一九六二）などと違って、『箱男』は毀誉褒貶にさらされ、その評価は定まっているとは言いがたい。本稿は作品解釈の隘路を切り拓くべく、箱男に革命家のイメージが投影されている事実を指摘し、そのモチーフの同時代性を考察することで、『箱男』の新たな側面を考察するものである。

#### 1 評価史の陥穽について

『箱男』はメタフィクション的な語りの構造を持ち、単一の物語

化を拒絶するテキストだと言える。ところが、これまでの評価研究史を概観すれば、解釈と物語化の欲望に抗しきれない研究者たちの姿が見える。同時代評価として解釈の基本線を引いた平岡篤頼は「小説家とは、小説という箱をかぶって、〈一人だけの密室〉から世界を覗く〈箱男〉ではないのか。だとすれば、この記述者＝箱男も、たまたま記述者となった箱男ではなくて、記述者であるがために箱男となった箱男ではないのか」と指摘する。章を追うごとに記述者が行為者と成り代わり箱男の自身が入れ替わっていくという優れた読みの極点に、作者という説明原理を準備してしまっただのである。一方で渡辺広士は『箱男』の視覚性に注目し「サルトルが『存在と無』の中で〈まなざし〉として扱ったこの意識の象徴的次元が、書くという行為＝書き方＝書かれたものという全体構造としてのエクリチュールの次元と重なることに不思議はない。書くとは鏡に映

すことであり、フィクショナルに書くことは少くとも二枚の鏡に映すこととなつて、多面鏡の世界に入る可能性は開けている」と評価する。しかしこの読みも、作者と切り離すことで作品解釈を放棄し、エクリチュールの次元に自閉する結果をもたらすのではないか。

つまり、「安部公房」という固有名を最高の審級として置くことも、逆に書くことへの無限後退の中で成立するアンチロマン的なテキストとして読むことも同様に、解釈者の想定するある種の物語性の中にテキストを封じ込める結果となつてきたのである。

かといつてある視点からの一貫した解釈に従うこともまた困難である。テキストの空白箇所を埋めようとしてなされる解釈は、一貫した記述主体を拒むテキスト自身の詐術によつて、固有名としての作者の意図に還元されてしまふか、語り手としての箱男の記述の真实性を疑うことに終わる。ここに解釈のアポリアが存在するのである。

モチーフの問題で言えば、テキスト末尾の救急車の登場と、次作『密会』（一九七七）へと続く病院というモチーフを暗喩として考察すれば、箱男をこの世界に対して不適合な存在と捉え、治療し管理矯正すべき対象とする解釈が容易に導かれる。匿名性に留まりながら一方的に他者を観察するという行為のいかがわしさに対して、研究者の立ち位置はポリテクレクトネス的に定まってしまう。

高野斗志美の言うように、「見る＝見られるという関係から脱落することは、市民社会の日常性から脱落していることをすでに語っている」の<sup>③</sup>のだとしても、田中裕之のようにそれを病的な徴候と判断し「見られることに対する怖れ、自閉性、カメラ、覗き、妄想と嫉妬、愛する対象の強引な支配・所有……。人間関係の失調という現代病に冒された存在である「箱男」「ぼく」は、ついには現代的犯罪の行為者と化してしまつたのだ」<sup>④</sup>とまで言うとき、テキストの可能性はむしろ箱男を嫌悪する日常性の中に閉じ込められてしまふ。

さらに、箱男の形象をテキスト外の現実引きつけて解釈を試みるとき、いわゆるホームレスの問題が一旦前景化されるのだが、テキスト自身が「箱男は浮浪者とは違う」と明記していること、匿名の存在となるための装置としてダンボールを主体的に選択していることなどから、現実とは微妙にすれ違つて行かざるを得ない。影山雄太の言うように、郊外都市のコンパートメントの代理表象として箱を捉える解釈は、引きこもりなどの現代都市の抱える問題にテキストを接続する可能性を持つが、前述するような治療Ⅱ矯正の対象として箱男を見なすというアポリアから自由ではない。

だが、箱男が記す「匿名の市民だけのための、匿名の都市」について次のような言説を積極的に読み換えるならば、匿名性というフィルターに籠城する病者としてよりも、むしろ現代都市に幻視さ

れる不可視のネットワークがそこに見出せるのではなからうか。

『扉』という扉が、誰のためにもへだてなく開かれていて、他人どうしだろうと、とくに身構える必要はなく、逆立ちして歩こうと、道端で眠り込もうと、咎められず、人々を呼び止めるのに、特別な許可はいらず、歌自慢なら、いくら勝手に歌いかけようと自由だし、それが済めば、いつでも好きな時に、無名の人ごみにまざれ込むことが出来る、そんな街《たとえばAの場合》<sup>⑥</sup>。本稿は『箱男』の元モチーフに立ち返って、その可能性を再考しようとするものである。

## 2 箱男とゲバラ

安部公房は、単行本の刊行と時を同じくして自作解説を試みている。単行本の箱には次のような文章が掲げられた。

都市には異端の臭いがたちこめている。人は自由な参加の機会を求め、永遠の不在証明を夢みるのだ。そこで、ダンボールの箱にもぐり込む者が現れたりする。かぶったとたんに、誰でもない存在になってしまえるのだ。だが、誰でもないということ、同時に誰でもありうることだろう。不在証明は手に入れても、かわりに存在証明を手離してしまったことになるわけだ。匿名の夢である。そんな夢に、はたして人はどこまで耐えうる

ものだろうか。<sup>⑦</sup>

このように、箱男は、匿名であるが故に誰でもない、と同時に誰でもあり得る、そんな存在なのだ。箱男となることは、アリバイと引き替えに永遠に存在証明を失うほどのことなのだ。なぜだろうか。同時に封入された談話「(豊庸にたすねて)」によれば、都市における自由な参加とは、農村構造が人間の帰属を強制することと対立している。永遠の不在証明とは最終的には国家への帰属を断つことへと通じるというのだ。

人間の歴史はその帰属をやわらげる方向に進んできた。しかし、最終の帰属として国家が残った。ここだけは破れないんだな。

法律もモラルもすべて帰属したワクの中だけにある。しかし、ま、その最終的な国家への帰属自身が問われ始めているわけだ。帰属というものを本当に問いつめていったら、人間は自分に帰属する以外に場所がなくなるだろう。<sup>⑧</sup>

このような談話の根底には、『内なる辺境』(一九七一年、初出は一九六八年)<sup>⑨</sup>においてなされた、都市的なものと農村的なものを対照させ、前者をユダヤ的な「異端」とし、後者を国家的な「正統」とする分析概念があるだろう。『箱男』の構想と並行してなされた考察は、箱男をダンボールを被ったホームレスとしてではなく、国家的なものへの帰属を拒むユダヤ的な存在と読む視点を示唆してくれ

る。

安部公房の元モチーフに関する発言はさらに辿ることが出来る。

談話記事「根なし草の文学」（一九六九）において次のように記録されている。

ぼくは現在、乞食とゲバラを題材にした長編小説を書いているが、そこでゲバラという人物を非常に重要視しているのは、彼もやはり一種の根なし草なんだというところなのです。<sup>10</sup>

ここでは「乞食とゲバラ」、即ちホームレスと革命家を、共に国家への帰属を拒む「根なし草」的存在として捉えている。ユダヤ的越境のモチーフを、イスラエルという国家の共同性を求める「正統」なユダヤ人に同定せず、既に途半ばにして仆れた革命家に比するところに、箱男の発想の原型が存在することが分かる。

エルネスト・ゲバラ（チェ・ゲバラは愛称）は、アルゼンチン出身で、キューバ革命から南米の革命運動に転戦し、一九六七年一月にボリビアで処刑された革命家である。公房のゲバラへの関心を遡ってみると、『内なる辺境』の末尾でも「国境を超えたゲバラは死んだし、国境を失ったベトナム人は戦火に身を焦がしている」と越境の困難さを示すように引例されていた。また、『燃えつきた地図』発表後のインタビュー「国家からの失踪」（一九六七）では「この次の作品を今、頭の中で練っているんですが、その新しい小

『箱男』における革命家幻想

説は、逃げ出してしまった者の世界、失踪者の世界、ここに住んでいるという場所をもたなくなつた者の世界を描こうとしています<sup>12</sup>と宣言しており、さらにゲバラについて次のように言及している。

極端な例だけでも、ゲバラなんかは、失踪奨励の第一人者といえるんじゃないですか。しかも、ただのあこがれじゃなくて、実体をともなつた失踪。ぼくの小説なんか幻影を幻影として与えるにとどまっているだけだけれども、実体として書ければ一番よいわけです。ともかくゲバラのような国家からの失踪が最も大きな失踪といえますね。<sup>13</sup>

社会主義革命をめざす革命家を国家的なものからの失踪者とみなす発想を理解するには、補助線が必要だろう。「根なし草の文学」において公房が「多くの革命家が祖国愛から出発しているのに対し、ゲバラというのは、おそらく国家や祖国のためにだけ革命を意図しなかつた最初の革命家なのです」と述べているように、ナショナルなものを超えたインターナショナルな解放闘争として中南米革命を闘ったゲバラの実践を、国境を超えた新たな価値観を求める運動として「国家からの失踪」と呼んだ訳である。

さて、『箱男』の執筆過程で「乞食とゲバラ」からゲバラを巡る構想は後退していったと見ていいのだろうか。確かに、表面的には箱男はダンボールを被ったホームレスに過ぎないだろう。しかし国

家的なものから逃走しようとする戦略において、なお箱男はゲリラ的な存在ではあるまいか、というのが本稿の見立てである。

『内なる辺境』においてゲバラの死にふれ、越境の不可能性を語るかにみえた安部公房は、『箱男』の脱稿間近までゲバラへの興味を持ち続けている。一九七二年六月二日の講演「小説を生む発想——『箱男』について<sup>15)</sup>」では、日本赤軍がイスラエルでゲリラ活動に関わった事件（テルアビブ事件）に関して、政府が干渉（謝罪と賠償）したことを国家の帰属化への原理として指摘した上で、ゲバラの場合でもアルゼンチン人がキューバの革命に関わることを批判する向きもあったとして、革命家と国家との関わりに触れている。

また同年の佐々木基一との対談でも「今度は乞食以下の世界をテーマにしているんだ。乞食まではまだこの世の人なんだよ。たとえば、最初からあの世的な革命家としてのゲバラ像というものがあるでしょう。これが乞食以下の世界でつながるのかもしれない<sup>16)</sup>」と発言しているが、「乞食以下」とは箱男の帰属から逃れた世界を暗示している。その含意は「要するに本物、にせ物という規定するのは最終的には国家でしょう。だから乞食以下になると、国家のスタンブというものの領域外に出ちゃう」という続く発言から明らかである。即ち国家への帰属からの逃走を図る存在として、箱男の根底にはゲバラに触発された革命家像が響いていると考えられるのだ。そこで

次に、『箱男』のテキスト内にその残響を見出す作業が必要となるだろう。

### 3 複数の箱男

『箱男』には複数の箱男が登場する。語り手の「ぼく」（元カメラマン）、《たとえばAの場合》の「A」と彼が空気銃で狙撃した箱男「贗箱男」（狙撃者、贗医者、《供述書》《Cの場合》のC）、《書いてあるぼくと 書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって》において「ぼく」の談話中に登場する「B」、そして「軍医殿」（《供述書》《続・供述書》の変死体）である。さらに《Dの場合》のアングルスコープを用いて覗きを行う少年Dは形態的には箱男とは呼べないが、AとDの符牒が付され箱男性が付与されており、ある箱男の過去の逸話とも読める。また、《夢のなかでは箱男も箱を脱いでしまっている。箱暮らしを始める前の夢をみているのだろうか、それとも、箱を出た後の生活を夢みているのだろうか……》における切手の発明者「シヨパン」の父もまた箱男である。

周知のように、『箱男』が完成する以前に、いくつかの断片が「周辺飛行」の名で発表され、改稿されてテキストに組み込まれている。<sup>17)</sup>《たとえばAの場合》、《Dの場合》、「シヨパン」の逸話などがそうのだが、注目すべきは「箱男 予告編——周辺飛行13」と

して発表された断片で、箱男Bに触れながらも『箱男』本文には組み込まれなかった部分である。

箱男Bは別の箱男（箱男Cとされるが贗医者とは無関係）を見かけたことから自らも箱男となった。彼もまた『箱男』の「ぼく」と同様にノートを持っており、その書き出しの部分は次のようになっていたという。

「あれは、聞いた話だったか、それとも読んだ話だったか、よくは思い出せないが、ともかく何処かにひどく心配性の男（さもなくば女）がいて、すこしでも長く部屋を留守にしていると、そのあいだに部屋が消えてしまうのではないかという不安から、しだいに外出が苦痛になり、ついには一歩も外に出られず部屋に閉じこもったまま、飢えるか、首をくくるかして、死んでしまったという。しかし、その死体を確認した者はまだいない<sup>18)</sup>。」

この後に、彼はそのまま箱男となって街へ出たのだ、と付け加えれば「B」自身の略歴となると語られる。この箱男Bが『箱男』本文の「B」と同一だとは断定できないが、その痕跡は残っている。引用した箇所の変り文字と言え文章が、テキストに記されているからだ。

「そいつの心配性は度を過ぎていた。ちよつとでも長く部屋を

留守にしすぎると、そのあいだに部屋が消え失せてしまうのではないかと、気が気でなく、おちおち外出もしてられないという始末だった。しだいに出不精がこうじた。部屋に閉じこもったまま、一歩も外に出られなくなってしまった。あげくに、飢えるか首をくくるかして、死んでしまったということだ。もつとも、誰もまだ、その死体を確認したというはなしは聞……」《書いているぼくと書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐる》

自分の部屋が消え失せてしまうことの不安から、外出が不可能となり、やがて死を迎えた「そいつ」の噂、それが箱男としての存在証明でもあるノートの冒頭に記されている。アイデンティティの根拠としての場所を喪失することへの不安から自由になるために、自らの存在を箱という部屋そのものと一体化させることに思い至った箱男、それが「B」であった。

ただし、『箱男』において語られるのは、「B」の死である。「ぼく」によって引用されたノートはページをめくることも叶わずぼろぼろに砕けてしまう。ダンボール箱の死骸が「B」の肉体的な死を意味するのか否かは定かではない。だが、書くことが唯一の存在証明である箱男にとって、ダンボールの内側の文字も判読不能となり、ノートと共に生死を判断する手掛かりも消え去った時、箱男として

の「B」は死んだと言つてよいだろう。

『箱男』のテキスト内では、「ぼく」を典型として、語り続けることがその生を保障している。例えば、箱男の扮装で急死する（殺される）「軍医殿」ですら《Cの場合》《死刑執行人に罪はない》において、自らを肉体的な死に追いやる「君」について語り続けている。その意味で「ぼく」が「B」の死を見届けたことは『箱男』のテキストにおいて特異なことである。その他の箱男たちがすべて「ぼく」の語りによって命を吹き込まれたかのように、連鎖してゆくのに対して、「B」の抜け殻を語る「ぼく」はそのノートの一節をダンプールの内側に転記するのみであり、語り手が「B」へと変貌することはなかった。

だが、転記されたノートが重要な意味を持つことも確かである。

例えば、田中裕之は「ぼく」の記述と「A」の記述を引き比べ、「ぼく」の知り得ない過去の出来事が記されていることから、「この手記が虚構である可能性が生じる」<sup>19)</sup>としている。「1」で述べたように、凡ての出来事を語りうる語り手を想定する時、それは作者であるか、もしくは信頼できない語り手となってしまうというアポリアが生じている。だが、ノートを転記することで箱男同士の意思の疎通がなされていると仮定すれば、「ぼく」が「A」を知り、さらに「匭箱男」が「ぼく」を知ることには不思議はない。虚構が現実か

を弁別するよりも、すべては誰かが書いたノートだと考えるべきなのではないか。<sup>20)</sup>

『箱男 予告編——周辺飛行13』の「B」は、深夜の街の一角ですべての人影が消え失せる無防備な瞬間に、何者かの襲撃の危険に脅えながら、匿名の箱男だけの街が到来することを待ち望む。

いまここは、箱男の街。匿名が市民の義務となり、誰でもない者だけに許された、居住権。登録された一切のものに対する、追放令。身分、職業、氏名、住所、年齢、性別、ツベルクリン反応、家族、血液型……そうしたすべてが、登録されていたというその事によって、裁かれ、追放されてしまったのだ。いま、何処かの街角に姿を現わす者がいるとしたら、当然おなじ箱男仲間。そう、これこそ本場の仲間だ。誰でもないと言うことは、誰でもありうるのと同じことだから、自分自身に対するように、互にへだてなく声を掛け合える。次々に戻ってきた箱男たちが、三々五々、連立って歩きまわったとしても、もう非難がましくおびえた目つきをする者もいなければ、眉をひそめる者もいないのだ。<sup>21)</sup>（傍点原文）

『箱男』本編にはあり得ない複数の箱男の行き交う幻想の街、『箱男』のテキスト内部でノートを共有する複数の箱男の関係性の原型を、ここに見ることが出来る。「1」で引用した《たとえばAの場

合』の「匿名の都市」の幻想は「あるいはAの場合——周辺飛行12」に加筆された部分だが、その根底にも同じ連帯意識が見られる。ただし、「B」が「B」であり続けるための、幻想とは逆の過酷な状況を「予告編」のテキストは語ってもいる。突然に姿を現わした襲撃者との闘い、火掻棒のようなものを手に、手慣れた動作でダンボールに衝撃を与える。「B」は手製のブラック・ジャックで応戦する。約十八秒に渡って繰り広げられた争闘で、後に残されたのは一人の死体。果たして何が行われ、何が変化しなかったのか。暴力を伴うテリトリー争いの様相は、『箱男』本編にもいくつかの痕跡を残している。

直接的には《たとえはAの場合》でAによって空気銃で狙撃される箱男の場合、「贗箱男」に狙撃された「ぼく」の場合、また「ぼく」と「ワッペン乞食」との縄張り争いであるが、箱の死骸を遺した「B」の運命や、「贗医者」と「軍医殿」のアイデンティティをめぐる争闘もその変奏と言えるだろう。贗箱男に向けて叩きつけられる鰐の縫いぐるみの重量感ほ圧倒的である。ノートの記述者をめぐる争いは、観念の遊戯に見えて、見方を変えれば過酷な暴力を伴うテリトリー争いなのである。

「箱男 予告編」の分析から、国家による帰属化の圧力に抗して箱男であり続けるために必要な暴力性が浮かび上がって来た。『箱

男』本編がその暴力性の痕跡を留めながらも、「ぼく」の観念をめぐる堂々巡りのごとく描かれるのは、ゲバラをその象徴とする革命家自身が偶像視され、ファッショナブルなアイコンとして消費される状況と関わっている。

匿名の箱男だけの街の幻想が、襲撃者によって破られる、しかしその後に残されるのは原因不明の死を遂げた男の死体のみであって、箱男の自身が変わっていてもだれも気にしない。「B」は「B」のままである。暴力が不可視化される社会の変化をそこに重ね併せてみる時、『箱男』本編から「B」の闘争が削除された理由も見えてくるのである。

#### 4 痕跡、そして箱の外へ

箱男とゲバラを結ぶ痕跡は、おそらく次の引用箇所隠されている。

もっとも最近の世相は、ますます推理小説には不向きな方向にむかっているような気がする。そう書きながら、ぼくが思い浮べているのは、たとえば月賦制度の普及ぶりなどのことだ。昔とは違って、注射を恐がりたりする者がほとんどいなくなつたように、もう月賦に尻込みしたりする者はめつたにいない。

しかし、月賦というのは、身分や職業や住所を、借金の担保に

すっかりさらけ出してしまふことなのだ。担保にできるほど確実な職業や名前を持っている者が、これほど一般的になってしまつては、犯人も探偵も、出番が少なくなるのが当然だろう。

こんな時代に、月賦の便利さにさらつてまで覆面をしたがるのは、ゲリラか、箱男くらいのもかもしれない。だがぼくはその当の箱男なのだ。反月賦主義者を代表する一人なのだ。

《ここに再び　そして最後の挿入文》

月賦制度は身分・職業・住所・氏名などの個人情報に分割払いを可能にする信用取引であるが、見方を変えれば個人情報が商品化され金融資本主義のシステムに帰属化されることとなる。その意味で身分・職業・住所・氏名を捨てた箱男が、金融資本主義のシステムに揺さぶりをかけようとする革命家のゲリラ戦略に似通つてくるといふ論理が語られる。月賦が金融資本主義のシステムを特徴するとすれば、反月賦主義者は反資本主義者であり、国家によって管理されることから逃れようとする存在だといふように読める。

《ここに再び　そして最後の挿入文》における「ぼく」が、「ワッペン乞食」と闘争する場面は、国家への帰属から逃れようとする箱男に対する襲撃者との闘争を、戯画化したものと読める。全身を玩具の勲章で覆い書くし、帽子には日の丸の小旗を立てた老人は、積極的に箱男を攻撃し、箱の上から日の丸の小旗を突き立てる。手懐

れた手つきで火搔棒を振り下ろす襲撃者と「B」の死闘に対して、明らかに弱者同士のいがみ合いにしか見えぬ、日の丸の小旗に殺傷能力があるとも思えない。しかし、市民社会の最下層に位置する「ワッペン乞食」から受ける攻撃に対して、おそらくは路上の石ころを投擲して反撃する箱男の姿は、反権力闘争のさなかにある過激派のふるまいに似ている。領域を守ろうとする者と、領域から逃れ去ろうとする者との闘争は、やはりゲバラの闘いを連想させる。

もう一度テキスト内の「B」の痕跡に戻ってみよう。箱男と不可視の襲撃者、もしくは箱男同士の闘争の末、「B」は箱の死骸を遺して消え去った。そこに気になる描写がある。

箱の内側には、粘土に押しつけた手型のように、かつての住人（符牒を仮にBとしておく）の生活の跡が、深く裏返しになつて刻み込まれていた。たとえば、あてがった割箸を絶縁テープでおさえて、裂け目を補強した跡。いまは変色して鳥の糞色のしみになつてしまった、ヌード写真の切抜き。箱が揺れないように、ズボンのバンドにくくりつけるための赤い紐。覗き窓の下の、プラスチックの小箱。さらに一面を埋めつくしている無数の落書の跡。余白の部分は、それぞれ大小の長方形で、かつてはそこにラジオや、小物入れや、懐中電燈などが吊されていたに違いない。《書いているぼくと　書かれているぼくと

不機嫌な関係をめぐって》(傍点原文)

「Bのミイラのひらき」と喩えられるように、ダンボールの内側に刻まれた「B」の生活状況が浮かび上がる。生活必需品のみならず、ダンボール内側の日記状の書き込み、孤独な性生活に關わる写真、補強された裂け目は何者かの襲撃の跡だろうか。プラスチックケースからは例のノートが発見される。そして、特に気になるのはラジオの痕跡である。

「ぼく」もまたかつて多くの荷物を溜め込み、FM付きの携帯用ラジオさえ所有していた。それは箱男になる以前「ニュース中毒」にかかつていたことの名残である。部屋では七種の新聞、二台のテレビ、三台のラジオで情報を捉え、外出時や眠りにつくときもイヤホーンを離さない。いつ何時どんな臨時ニュースが流されるとも限らないという不安に取り付かれた「ぼく」は、事実でも体験でもなく、世界の鑄型としてのニュースという形式そのものに中毒していたのだという。

世界のあらゆる帰属から逃れようとする箱男が、ラジオのニュースからは離れられないというアイロニー。幸い「ぼく」は、ニュースになる価値もない一人の男の死を目撃することで、ラジオ中毒から解放される。思い起こせば「ぼく」は元カメラマンだったのだから、撮影し、聴取し、そして書くという極めてメディア的な箱男だ

『箱男』における革命家幻想

つたのだと言える。

永野宏志の指摘するように、『砂の女』において終盤にラジオが届けられる場面は重要な意味を持っていた。「電子メディアの日常への侵入によって外の世界との距離はなくなり、ラジオから流れる情報は実在と同等の価値を持つようになる」のであり、「ラジオはすぐ身近に存在し、男の脱出の意思を弱める」のだ。『砂の女』の場合ラジオは一種の「監視システム」<sup>25</sup>でもあるわけだが、仁木順平が脱出をやめるラストが両義的なのと同様に、ラジオは外部への回路でもあり得たのだ。『密会』においてもFM盗聴器が重要な役割を演じたように、ラジオは世界を監視する装置であると同時に、世界に監視されるという両義性をはらんでいると言えるだろう。

ラジオの意味について補助線を引いておきたい。当時記憶に新しいアルジェリア内戦に関して、フランツ・ファノンが面白い指摘をしていた。独立を目指すアルジェリアの反政府活動家たちは、フランス共和国よりの放送に対抗して自由放送ラジオを立ち上げた。電波状況が極めて悪い中でも、アルジェリア独立を支持する聴取者たちはその声に耳を傾けた。そのことの意味が以下のように語られる。

この声は、しばしば不在であり、物理的に聴取不能であつても、各人は自分の中にその声が高まって来るのが感じられ、内的知覚——それはとりも直さず「祖国」の内的知覚なのだが——に

支えられて、いや応なしに物質化されるのである。そして個々のアルジェリア人は、自分なりに新しい言語<sup>②④</sup>を行使して放送し、伝達する。

「こちらはアルジェリアの声」と語りかける自由放送ラジオ、その集団性と包摂性は、権力への対抗暴力としての力と自由への切望を示す。それと同時にラジオというメディアの持つ極めて強力な中心化の力を証明している。元ニュース中毒患者で箱男の「ぼく」がメディアの残響の中で、日々ノットに自らの声を記録する様相は、ラジオ中毒からの治癒の過程であると同時に、都市空間に偏在する生権力としてのメディアのあり方を逆説的に証明しているのではないか。

同時代のコンテクストとしてもう一点付け加えたい。「軍医殿」「贖医者」などに見られる戦争体験のモチーフは当時極めてリアルティに富んだものだったのである。一九七二年一月二四日グアム島で発見された旧日本軍兵士横井庄一の帰還と、加えて一九七四年三月一二日における小野田寛郎の帰国を準備した一九七三年におけるルバング島の大捜索とは、国家への帰属証明をもたらすものだと安部公房は指摘している。

潜在的なモチーフとして一九六七年一〇月九日にボリビアで処刑されたチェ・ゲバラのイメージが存在することを併せて考えれば、

一見時代性を排除した都市小説と見える『箱男』には、意外に現実的な背景が備わっていることになるだろう。

### 終りに

ゲリラとしての箱男とは奇矯なイメージかもしれない。しかし、高度資本主義社会において商品経済から自由に食物を入手したり、ホームレス排除に抵抗したりしながら移動を続ける箱男は、その匿名性においてより積極的な存在として読み換え得るのである。

ニュース中毒／ラジオ中毒であったブレ箱男の「ぼく」が、情報管理から自由になり、引き替えに手記を書くこと、それもダンボールの内側の履歴書として自らの存在証明を手に入れたとすれば、そのアイデンティティは複数の箱男の連帯を潜在させている。それは都市に生息するわたしたち自身の時代感覚に通じるものである。

箱男Bの抜け殻から転写されたエクリチュールに代表されるように、複数の箱男の記述を重ね書きにされたノートは、ある種のプロテストとして増幅されるのだ。ブラックジャックとカメラという闘争／逃走の武器を携えた箱男は都市の暗部で闘っている。ジオナサン・クレリーの指摘のように、フーコーのパノプティコンをモデルとした権力装置の分析に対し、「視覚それ自身をある種の規律『の対象』、あるいは作業Ⅱ労働の一様態と化してしまう諸形態の誕

生」<sup>27)</sup>がポスト近代社会の内的権力だとすれば、都市に巡らされた観察者の視線を遮断し、一方的に見る装置としてカメラを持った箱男の抵抗の姿勢は明らかだろう。贗箱男との間に暴力を惹起したのが、手記の冒頭に掲げられたネガフィルムであることを思い起こせば、箱男の闘争／逃走の記録として『箱男』は読めるのである。

注

- ① 平岡篤頼「フィクションの熱風（迷路の小説論八）」、『早稲田文学』一九七三年八月号。
- ② 渡辺広士「アヴァンギャルドの迷路——安部公房論——」、『文芸』一九七三年九月号。
- ③ 高野斗志美『新潮日本文学アルバム安部公房』（一九九四年四月一日、新潮社）、八一頁。
- ④ 田中裕之「箱男」論（一）——「箱男」という設定から——、『梅花女子大学文学部紀要』三二号、一九九七年二月。
- ⑤ 影山雄太「都市モードの解体——安部公房『箱男』——」、『日本文芸論叢』一五号、二〇〇一年三月。
- ⑥ 『箱男』本文の引用は単行本（一九七三年三月三〇日、新潮社）によった。
- ⑦ ⑥に同じ。
- ⑧ 『安部公房全集』24（一九九九年九月一〇日、新潮社）、一四五頁。
- ⑨ 『内なる辺境』（一九七一年一月一日、中央公論社）には「ミリタリイ・ルック」（『中央公論』一九六八年八月号）、「異端のパスポート」（『中央公論』一九六八年九月号）、「内なる辺境」（『中央公論』一九六八

『箱男』における革命家幻想

年一月号、二月号）が収められている。

- ⑩ 『波』一九六九年九・一〇月号、『安部公房全集』22（一九九九年七月一〇日、新潮社）、三五四頁。
- ⑪ ⑨に同じ。『安部公房全集』22、二二八頁。
- ⑫ 『日本読書新聞』一九六七年二月二〇日号、『安部公房全集』21（一九九九年六月一〇日、四二九頁）。
- ⑬ ⑫に同じ、四二七頁。
- ⑭ ⑩に同じ。
- ⑮ 講演「現代乞食考」、一九七二年六月二日、第66回新潮社文化講演会（於東京新宿・紀伊國屋ホール、新潮カセット『小説を生む発想——『箱男』について』（一九九三年一〇月二〇日、新潮社）、『安部公房全集』23（一九九九年八月一〇日、新潮社）、三四五頁）。
- ⑯ 安部公房・佐々木基一、対談「私の文学観演劇観」、『新刊ニュース』一九七二年六月一日号、『安部公房全集』23、三五四頁。
- ⑰ 「物語とは」——周辺飛行1」（『波』一九七一年三・四月号）、「（と）ころで君は」——周辺飛行2」（『波』一九七二年五・六月号）、「（これ）はある職業的關係によつて」——周辺飛行5」（『波』一九七一年一一・一二月号）、「あるいはAの場合——周辺飛行12」（『波』一九七二年九月号）、「箱男 予告編 そのII——周辺飛行14」（『波』一九七二年二月号）。
- ⑱ 「箱男 予告編——周辺飛行13」（『波』一九七二年一月号）、『安部公房全集』23、三九二頁。
- ⑲ 田中裕之「箱男」論（二）——その構造について——、『梅花女子大学文学部紀要』三三号、一九九八年二月。
- ⑳ 「ノート」の意味については、永野宏志「書物の「帰属」を変える——安部公房『箱男』の構成における「ノート」の役割」（『工学院大学

研究論叢』五〇巻一号、二〇二二年一〇月）が詳細に論じている。

⑲ ⑱に同じ、三九三頁。

⑳ 永野宏志「電子メディア時代における異化……一九六〇年前後の安部公房のテレビ脚本・SFから『砂の女』へ」、鳥羽耕史編『安部公房メディアの越境者』（二〇一三年二月九日、森話社、二七五頁）。

㉑ 木村功「『砂の女』論——〈仁木順平〉から〈男〉へ——」、『宇部短期大学学術報告』三四号、一九九七年七月。

㉒ フランツ・ファノン『革命の社会学——アルジェリア革命第5年』（原著一九六〇年、訳書一九六九年七月三日、みすず書房、六一頁）。ちなみに、フランス領マルティニーク出身で、アルジェリア解放戦線に参加したフランツ・ファノンについては、安部公房とも親しかった堀田善衛が「エルネスト・チエッ・ゲヴァラと現代世界」（一九六七年一月、『講座・中国Ⅳ』筑摩書房、所収）、「第三世界の栄光と悲惨について」（一九六八年一〇月、現代人の思想一七『民族の独立』平凡社、所収）などで詳しく紹介している。いずれの文章にもゲバラが論じられていることもあり、安部公房も目を通している可能性は高い。また、針生一郎との対談（『ゴタールの可能性は何か』、『映画芸術』一九六九年三月号、『安部公房全集』22）でも針生からファノンの名前が挙がっている。

㉓ 横井庄一の場合は安部公房・磯田光一、対談「人間・共同体・芸術」（『國文学——解釈と教材の研究』一九七二年九月号、『安部公房全集』23）で触れている。また、ルバング島の捜索については「『書齋にたずねて』（⑧に同じ）で触れている。

㉔ 真銅正宏は、箱男の「複数性」を「読者」の寓意とし、「むしろ作品にはそれぞれの連帯ともいべき状態が描かれている」（『箱男』の寓意——連敵・越境・迷路）、『國文学——解釈と教材の研究』一九九七年

八月号）と指摘している。

㉕ ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜——視覚空間の変容とモダニティ——』（原著一九九〇年、訳書一九九七年二月一日、十月社）、三八頁。